酒呑みの自己弁護

山口瞳

酒呑みの自己紹介
山口晴温

酒呑みの自己弁護

昭和四十八年三月三十日　発行
昭和四十八年六月　十　日　三刷

定価　七五〇円

著　者　山口瞳

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社　新潮社
東京都新宿区矢来町七一
郵便番号　一六二
電話東京(260)二二番(大代)
振替　東京　八〇八番

（乱丁・落丁のものは、本社または買求めの書店にてお取替えいたします。）

印刷・三晃印刷株式会社　製本・神田加藤製本
© 1973 Hitomi Yamaguchi. Printed in Japan.

酒呑みの自己弁護　目次

私の担任教師は、若くて、非常に優秀な教師だった。受持の生徒を、三人か四人ずつ交替で自分の下宿先に招き、勉強をさせながらそばで、ゆっくりと酒を飲んでいた。生徒が疲れてきて眠くなってくると、チョコで一杯か二杯の酒を飲ませて励ましたのである。
（はじめての酒②）

はじめての酒①　8
はじめての酒②　10
はじめての酒③　12
甲府の葡萄酒　14
飯盒の酒　16
暗がりの酒　18
空襲の翌朝　20
お流れ頂戴　22
お燗番　24
酒亭たにし　26
最後の高見順さん　28
天に昇る電車　30
酒場の勘定　32
私の先生　34
幻のマルチニ　36
千秋楽の酒　38
札幌の夜　40
大宴会　42
自信加藤　44
文士劇の酒　46
ドライ・マルチニ論争　48
外野席の酒　50
鬱屈の頃　52
ダービーの夜　54

酒呑みの自己弁護　目次

私は酒場が好きである。それも小さな酒場が好きだ。一杯呑み屋も好きだ。だいたいそういうものがなければ、小粋なフランス映画も久保田万太郎さんや川口松太郎さんの芝居も成立しないのである。そういうもののない人生なんて、とうてい私には考えられない。

〈真面目な話〈補遺〉〉

草野球の日　56
書について　58
作家の自殺　60
赤くなったモデル　62
うまくない葡萄酒　64
撮影所の酒①　66
撮影所の酒②　68
撮影所の酒③　70
川島雄三さん　72
イワナ釣り　74
風呂屋の酒　76
武蔵野工場落成式　78
真面目な話①　80
真面目な話②　82
真面目な話③　84
真面目な話④　86
真面目な話⑤　88
真面目な話⑥　90
真面目な話⑦　92
真面目な話⑧　94
真面目な話⑨　96
真面目な話⑩　98
真面目な話（補遺）　100
国歌吹奏　102

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

酒呑みの自己弁護　目次

座談会を活字で読むときは、特に後半は、変な発言があれば、その人は酔っていると思ったほうがいい。座談会には〝(笑)〟とか〝(笑声)〟とかがつきものであるが、私は〝(酩酊)〟など注をいれたほうが読者に親切ではないかと思っている。

（殺して飲む）

競馬の予想　104
鹿児島の酒　106
ハモニカ横丁　108
冬の夜に　110
オン・ザ・ロックス　112
バー調査　114
花見酒　116
徳川夢声　118
CM出演　120
宝塚　122
黒尾重明　124
木山捷平さん　126
ボーイ泣く　128
ビールの不思議　130
炎天のビール　132
ビールの利尿作用　134
酔っぱらい①　136
酔っぱらい②　138
酔っぱらい③　140
殺して飲む　142
赤木駿介さん　144
あっさりと　146
こっちの酒は苦いぞ　148
王貞治　150

酒呑みの自己弁護　目次

酒がテーマになっている小説では、O・ヘンリーの『失われた混合酒』の右に出るものはない。酒の出てくる小説は無限といっていいくらいにあるし、小説としてすぐれたものがあるけれど、酒そのものを描いた小説においては、誰もこの短編に遠く及ばない。
（失われた混合酒）

失われた混合酒 152
美少年 154
いまから酔うぞ 156
福島競馬場 158
テレビ局の酒 160
岡田さうさん 162
外国旅行 164
虫明亜呂無さん 166
禁酒時代の作品 168
梶山季之さん 170
直木賞の頃① 172
直木賞の頃② 174
食堂車 176
朝の酒 178
イビキ 180
私の愛読者 182
海のホテル 184
かくれジャイアンツ 186
女房の父 188
泰然自若 190
鉄火場の酒 192
秋草の頃 194
子供の酒 196
自由ヶ丘の金田中 198

酒呑みの自己弁護　目次

カラミ型の人間を観察してみると、第一に小心である。内攻的である。自己反省癖が強い。誰かにカランでしまった翌日は、いたたまれないような気分でいるのではないか。小心というのは悪口ではない。私は、小心というのは、小説家の一資質だと思っているので。

（からまれる）

屋久島の酒場　200
鍋奉行　202
酒飲まぬ奴　204
酒の無い国　206
盲人の酒　208
営業部第三課　210
居酒屋　212
同期会　214
会社の宴会　216
からまれる　218
冬でも扇子　220
よく飲むなァ　222
大橋巨泉さん　224
宿酔　226
食べない人　228
酒場のエチケット　230
体にわるい　232
あとがき　234
索引　236

装幀
挿画

山藤章二

酒呑みの自己弁護

はじめての酒 ①

最後の一杯もうまいけれど
最初の一杯も
うまい

私の家は軍需成金だった。景気がいいということでは、大東亜戦争がはじまった昭和十六年頃が絶頂であったと思う。そのとき、私は、中学の三年生だった。

私の家の台所には、いつでも白鷹の樽が置かれていた。その頃の東京では「白」のつく酒が多く飲まれていたという記憶がある。白鹿、白雪など。

いつ頃から酒を飲むようになったか覚えていないが、その頃の私は樽酒の味を知っていた。樽酒に馴れると、瓶詰は味が落ちるように思われてきた。樽のほうが味が濃いように思った。特に、樽の中身がだんだんに減っていって、最後の一杯というあたりになると、ドロドロとしてきて、非常に濃厚で、うまいと思った。早く減ってくれればいいと思ったりした。

最後のほうの一杯もうまいけれど、樽の栓を抜いたばかりの最初の一杯もうまい。これは、酒にかぎらず、ウイスキーでもビールでも何でもそうである。最初の一杯がうまいし、もうこれでおしまいだという時の一杯がうまい。出あったときと、お別れのときがうまい。特に樽酒はそうであって、早く減ってくれればいいと思っていても、いざ別れるとなると辛い思いをする。あるいは、人生一般について、何事でもそういうものであるかもしれない。

いま、こう書いてきて、やはり、酒樽がいつでも台所に置いてある家というのは普通ではないように思う。戦前は樽酒がよく飲まれたが、それでも珍しい家であったに違いない。

中学生である私が樽酒で晩酌をやっていたのではない。酒を飲むことは許されていなかった。つまり、もっぱら盗み酒である。従って、私の酒は常に冷やであった。樽の栓を抜き、コップで受ける。あたりを見廻して、すばやく飲む。

ところが、不思議なことに、酒に関するかぎり、盗んで飲んでも罪悪感がなかった。これは、どういう加減のものであろうか。戸棚をあけてボタ餅を盗んで食べると

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

いうのとは違っていた。ボタ餅のほうは、なにか、卑しい感じがする。私も、ツマミグイをするようなことはなかった。

一日にマンジュウを十箇喰わないと気がすまない人がいる。これも卑しい感じである。一日に酒を一升飲む人がいる。それでもって平然としていれば、これは豪快である。

ジョン・ウエインやクラーク・ゲイブルの演ずる西部の男がバーボン・ウイスキーをストレートで呷って馬に乗って出てゆく。これは爽快である。

ジャック・パランスの殺し屋が、酒場の隅でブラック・コーヒーを飲む。ジョージ・ラフトのギャングがミルクを飲む。これは陰惨で苛烈な感じがする。

このあたりが酒飲みの得である。

わが師吉野秀雄先生の歌に

酒の慾を卑しとせねば大宮の酒を酔うまでいただきつ吾は

というのがある。

酒の盗み飲みをやっているところを女中にみつかっても「あらあら、まあ、坊ちゃん」というぐらいで済んでしまった。これがマンジュウの数が足りなくなったり、センベイが減っていたりすれば女中の責任になる。

母にみつかっても、ひどく叱られるようなことはなかった。戦前の男は、それが子供であっても、大事にされ、男であるということだけで尊敬されるという気味あいがあった。

男が酒を飲んで何が悪いか。酒ぐらい飲めなくてどうするか。まあそういったものであったろう。

しかし、私の酒は、せいぜい、コップに一杯だった。世のなかにこんなにうまいものはないと思っていたけれど。

はじめての酒 ②

昔の先生はよかった
勉強みながら
一杯で激励

私が最初に酒を飲んだのは、小学生のときである。五年生か六年生のときだった。

私に酒を飲ませたのは、小学校の担任の教師だった。こういうところが、戦前と戦後とでは、ずいぶん違う。なんだか、西部劇で、老いたるカウボーイが「昔の西部はよかった」と呟いているような気分になるが、こういうことになると、本当に、昔はよかった。

いま、こんなことが行われたら、大変な騒ぎになるだろうし、ひょっとしたら新聞ダネにもなりかねない。

私の担任教師は、若くて、非常に優秀な教師だった。受持の生徒を、三人か四人ずつ交替で自分の下宿先に招き、勉強をさせながらそばで、ゆっくりと酒を飲んでいた。生徒が疲れてきて眠くなってくると、チョコで一杯か二杯の酒を飲ませて励ましたのである。

その酒を私はそれほどうまいとは思わなかった。もっとも、そのときにうまいと思ったら、それこそ大変なことになる。ただし、教師が、私を大人のように扱い、男として扱ってくれたのは気持がよかった。

私は、教育とは、生徒をヤルキニサセルことだと思っている。そのためなら、多少の乱暴は仕方のないことだし、いいことだと思っている。戦後の教師は、これは教師にかぎったことではないが、人間が小さくなってしまってきている。

*

台所に、酒樽のほかに、ウイスキーも置かれるようになった。それも、サントリーの角瓶の十二本入りの箱が置かれていた。このほうが、酒樽よりも豪華な感じがした。ウイスキーをケースで買うというのが豪華なのである。父が軍需景気で潤っていたからであった。

私は、戦前の私の家が軍需成金であったことを恥とするようなことはない。そのことに関しては割に平気であり、誰にでもそう言い、そう書いてきた。

日本のすべての産業がそうであった。軍の庇護なしに成長した産業は無かった。これは実は、戦後においても

同様だった。

戦後において、ナニナニ・ブームというのが何度も起るけれど、その最初のほうのブームに、カメラ・ブームがあった。なぜそうなったかというと、戦争中において、軍隊が、レンズの会社を庇護したからである。いうまでもなく、望遠鏡をつくらせるためであった。そのために、カメラ会社が、他にさきんじて復興したのである。

サントリーについても同じことが言える。ウイスキーを日本全国にひろめたのは、実に、日本の軍隊であった。

サントリーも軍の庇護を受けた。ウイスキーが軍隊に配給されるようになった。アルコール度数の強いウイスキーは酒よりも便利であった。それまで、ウイスキーの味を知っている日本人の数は極めて少数であったといっていい。

「この良きもの」を知ったのは戦争のためでもあった。特に、戦地で、サントリーの角瓶を見ると、兵隊は狂喜し、奪いあいになったのである。香港に凄くうまいウイスキーがあるので分捕ってきたというので、見ると、それはサントリーだったという話がある。

戦争が終り、復員が行われ、ウイスキーの味を知った日本人が全国に散らばっていったのである。戦後の洋酒ブームには、こういう下地があった。

これは歴史的な事実であって、恥とするような事柄ではない。

だいたい、こんなに酒が飲まれるようになったのは、戦時中の配給制度のためでもあった。配給されるのだから飲まなければ損だということになった。それではじめて酒を飲むようになった人は大勢いるはずである。煙草も同様だった。

はじめての酒 ③

部屋がグルグル……
快楽も過ぎると
苦痛ですネー

台所に樽酒とウイスキーがあったけれど、私は、ウイスキーは飲まなかった。あれは、ちょっと、こわい感じがした。高価で貴重なものだと思っていた。

その頃、どういう関係でそうなったのか知らないけれど、新聞記者が何人か遊びに来ていた。私は毎日新聞で福湯豊という署名のある随筆を読むと懐かしい気がする。変った名なので覚えている。こちらは中学生なので、むこうのご記憶はないだろう。新聞記者は、私の家で麻雀をやっていた。

そのなかに蔵田さんがいた。蔵田さんは、いま、競馬評論家になっていて、そのほうの権威である。その頃は、やはり毎日新聞社に勤めていて、宮内庁を担当していた。

蔵田さんは麻雀がうまく、強かった。私の知っている範囲では、一番強いように思う。私はうしろで見ていて惚れ惚れとしていた。蔵田さんは、酒もよく飲んだ。何か破れかぶれみたいなところがあって、それが一種いさぎよい感じでもあった。蔵田さんは私の博才を評価していて、私が小説を書くようになったのを驚いていた。「バクチの才能があるのは知っていたけれど」と言われた。

競馬場で蔵田さんに会うと、いまや悠然としていて『人生劇場』の吉良常を見る思いがする。競馬で儲けようと思っちゃいけない、お遊びなんだからと言われる。

昔の蔵田さんは飛車角か宮川であって、鋭い気合いがあった。こっちは青成瓢吉かな。どうもあまり冴えた『人生劇場』ではない。その蔵田さんが、空襲になると、まっさきに防空壕へ飛びこむ。それはいいのだけれど、いつでも一升瓶を持って逃げた。

空襲のときに酒を持って逃げるというのは、私の感覚からすると、奇妙だった。変った人だなと思った。いま考えると、蔵田さんは酒と心中しようと思ったのではなく、恐怖感でそうなったのだと思われるけれど、当時の私としては、それも小気味のいいことに思われた。

麻雀で遅くなると、蔵田さんは私の部屋に泊った。

ある朝、蔵田さんは、布団のなかで煙草を吸っていた。隣の布団にいる私を見て言った。

「あれッ？　朝起きて、きみは煙草を吸わないの。……そりゃあ、体に毒だぜ」

私は、すでに煙草も吸っていた。

蔵田さんは、酒のことに関しても、煙草のことでも、世間一般の常識とは逆のことをして、逆のことを言った。

それは私にショックをあたえた。大袈裟に言えば、私の人生観を変えてしまった。

朝、目がさめてすぐに煙草を吸うと実にうまい。それを我慢して吸わないでいるのは健康に悪いということになるのだろうか。私は蔵田さんの言葉はよくわからなかったのであるけれど、そこに何かがあるような気がした。

戦時中である。快楽を我慢するのはよくないという言い方は、私にとって新鮮だった。

＊

私が最初にウイスキーを飲んだのは、中学四年の時だったと思う。

私と兄とが父に連れられて柏崎へ行った。

柏崎の旅館に着いたとき、私は腹が減っていた。食事が運ばれるのが遅いので、ウイスキーを飲んだ。なにか、口にも腹にもゴツンと突き当るような感じで、たちまち天井に引きあげられるような快美感を味わった。

こりゃあうまいやと思い、三杯か四杯飲んだ。

気がついたとき、私は横になっていた。目をつぶっていても、部屋がグルグル廻っていた。快楽を我慢するのはよくないといったって、むさぼり過ぎると、こういう報酬があるんだなと思った。

グルグル廻る部屋は、その後も何度も経験した。大人になるということも大変だなと思った。

甲府の葡萄酒

忘れられぬあの味
こすっからい〝人情〟
忘れる

昭和二十年の七月のはじめに、私は、甲府の連隊に入隊した。当時の年齢の数え方でいえば二十歳、いまでいえば十八歳である。

入隊してすぐに甲府の中心地を焼きつくす大空襲に出会った。

空襲のあとには、不思議な解放感があるものである。守るべきものは、もう何もないといった感じになる。肩の重荷がおりたようで、実際に体が軽くなり、スッキリとする。解放感と虚脱感であろうか。

そういう感じは、軍隊のなかだけでなく、町のなかにもあった。甲府は温泉の町である。市中に湯が湧き出る。湯村温泉なんかがそれである。

温泉であるということは、空襲で浴場が焼け落ちてしまっても入湯できるということである。つまり野天風呂である。そこに簡単な囲いをして温泉にはいる。空襲で埃や灰をかぶっているから、誰だって風呂を浴びたいという気持になる。

私は兵隊で使役に出ていて、ちょっとした岡の上にいたり、あるいは線路上で作業していたりすると、こういった温泉のなかがまる見えになる。

私は、こんなふうに、公然と、多数の裸女をいっぺんに見るのは初めてのことだった。こちらから見えているのがわかっていて割に平気でいるというのは、やはり、解放感であり虚脱感であり、戦争であったと思う。恥ずかしいなんて言っていられない。

食糧のほうもそうであって、空襲のあとは罐詰類が豊富に配給された。ラベルに焼け焦げのあるサケ罐などがあった。

町に使役に出ると葡萄酒を飲ませてくれる家があった。私の記憶では葡萄酒は瓶にはいっていた。

もちろん私はそれを飲んだけれど、班長にひどく叱られた。私は入営以前から下痢が続いていて、彼がそれを知っていたからである。

甲府に関しては、いい思い出といったものが残ってい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com